

能世一茶集

四

1 4

3157

30(4)



40

50



54  
2/57  
30  
(4)



俳諧一葉集附合之部三

古學庵佛号  
幻窓 湖中 編  
坎窩 久藏 校

元禄二己巳

菖蒲のうきふらふらと川を渡る  
吹砂けしきしきまのちき 花  
物と物降りくぬ影ささハ立て  
七糶 山を如うの月  
町造り葉の葉より砂よりけ  
家よりくほくふりつるの血  
雪 霜



坊主とも老ともいふは進之出  
 土の餅つく神事おまゝ  
 生落し燻付りし市いふ  
 り管く跡つ和らきうけ  
 去白丸壇おふ食とつふ  
 ふうくし鳥をよこし跟  
 舌根千念佛を修む屋  
 小珠ハ福の中にはけり  
 杖と折き路ハ破上り  
 膝行不伝や姨捨の月  
 委切手坊相成りし  
 陽冷せしお糶のふき

霜 雪 霜 雪 霜 雪 霜 雪 霜 雪

舟の夏も舟の尺達し  
 川の舟のうつ桶の名を  
 柴垣の古木お破ま  
 後とよんし様はら  
 季よりよのひしを  
 髪きる言此月了  
 長門より西の歌は  
 粥より玉子お和と  
 山をむの海名多  
 ちりし餅をくノ  
 やうきん大江の岸ハ  
 削りし以て杖箱の

雪 霜 雪 霜 雪 霜 雪 霜 雪 霜

沙謀及とたの酒のぬきめ河法  
宜能の杖千種と書つて  
記くまう能も物もさあし  
法こめ (と) 田新 渡つ書

翁 堂 翁 堂

陽炎の赤肩子に一つ紙衣の  
水糸くう千付し一足ぬく  
杜のたあし智法のみ物あつて  
多をううそ人千様め海可け  
ううううの回し多あ千海うう  
うううもかくけ物し多うう林

翁 曾良 塔山 此筋 良 翁

秋の八木海子ぬれとて西白  
納ふうううの物併の粒明  
五月中のし小袖の縁も親以  
着しる髪を箱さううつ  
あつて下ふ人ううも物さし  
ほそくさうう毎のやさしき  
多をそらううに火焼ぬき  
手よるうううの待法とむる  
物のきも友を友をう吹うう  
柳の葉し山をうけの家  
松有あうう東ハ海と花  
浪ハうううの宿古を物す

翁 山 良 翁 山 良 翁 山 良 翁 山 良 翁



藤のつらさゝたきりく  
 藤のつらさゝたきりく  
 藤のつらさゝたきりく  
 藤のつらさゝたきりく  
 藤のつらさゝたきりく  
 藤のつらさゝたきりく  
 藤のつらさゝたきりく  
 藤のつらさゝたきりく  
 藤のつらさゝたきりく  
 藤のつらさゝたきりく  
 藤のつらさゝたきりく  
 藤のつらさゝたきりく

良 柳 良 柳 良 柳 良 柳 良 柳 良 柳 良 柳 良 柳

藤のつらさゝたきりく  
 藤のつらさゝたきりく  
 藤のつらさゝたきりく  
 藤のつらさゝたきりく  
 藤のつらさゝたきりく  
 藤のつらさゝたきりく  
 藤のつらさゝたきりく  
 藤のつらさゝたきりく  
 藤のつらさゝたきりく  
 藤のつらさゝたきりく  
 藤のつらさゝたきりく  
 藤のつらさゝたきりく

良 柳 良 柳 良 柳 良 柳 良 柳 良 柳 良 柳 良 柳 良 柳

昔の葉ハ猿の海や波はらん  
夕を味く人 桑うら  
ふも又おろきをおむ石の上  
展 甘くきつて只の舟 舟  
真すちと叶をのくは杜宇  
かたはりの先と扱る丸葉  
花のたの波をさぬ、波をこ  
めさくくとしつゝ火煙をま  
一葉の

里 翁  
翁 良 梅  
柳 雪  
二寸  
曾 良

たぐの風程を物よりさつ  
路のふり脚を花とるま  
際生くれくまのつこも

越 輪  
秋 鴉  
桃 里

四月廿二日

風流のけめわたくの何程歌  
度重るをたてあまけ子  
水と記て屋敷の石やまけしん  
露子一鉢のあういすう  
一葉のく月とまきふ川 柳  
屋下を根ふく村を 秋ふつ  
跡の女の上縁と佛のまを酌て

翁 良 翁  
曾 良  
翁

女成るもの一やとほむる物  
あつたは増もも管の入ぬるむ  
梓の小枝子、をを滴こ  
うみては妹、鳥の足も惜し  
音の陣、山や白鳥おとけ  
酒より八軍を送る、寄る本こ  
秋を去る、方と物と、一信  
文、秋の壁つ、不破の麻の角  
多田のお伽の位ふさ、月  
いろく、の形も、ち、舞、あて  
也、き、骨を、は、く、糸、遊  
山、を、死、危、を、く、手、や、む、あ、う、い

翁 良 船 翁 良 船 翁 良 船 翁 良 船

芥 塚、と、う、う、信、あ、つ、め、い、ふ  
新、い、く、ち、を、一、筋、の、法、あ、う、そ  
村、の、く、武、士、の、み、を、籠、る、木、高  
華、と、く、ぬ、の、あ、志、の、母、を、合、ん  
字、子、百、花、一、く、お、名、を、つ、の、し  
多、枝、子、を、お、お、財、を、さ、い、入、を  
何、や、う、事、一、れ、た、ぬ、七、又  
修、習、る、木、の、枝、れ、れ、木、を、足、よ  
す、き、き、希、く、む、お、木、の、ぬ、み  
切、櫓、枝、く、く、く、に、く、強、し  
左、山、鶴、の、あ、う、そ、く、く、く、  
味、一、さ、や、留、ち、く、あ、く、あ、う、あ、

翁 良 船 翁 良 船 翁 良 船 翁 良 船



穀生石瓦ふと〜の  
花をききま〜ぬひをききま〜  
酒の中〜のききま〜  
六十のぼろ〜人の正月ふれ  
春のつ〜少細〜

良新翁良新

業門可伸のゆ〜の木のた〜  
む〜

翁

から好たゆや目〜ぬ花を料の葉  
すれ〜  
き〜崩す山おれ名〜  
畔傳心する石の棟〜

栗齋等翁曾良

把〜  
秋走〜  
梓弓〜  
秋書〜  
松留金〜  
酒の遺恨〜  
聲入〜  
され〜  
月〜  
智〜  
笠の端〜

等雲次平素葉富翁良新富翁

梅千ねり秋澄やと一秋の月  
 かきつたる音も証被あし  
 三月の月をききしるるも  
 ありゆるとれぬ思数えしき  
 まる繁花のゆく春の美しく  
 かきしる一秋の操や音しく  
 うもゆの音ききしるる海舟の年  
 杯をとりしる市井酒酔  
 の傍り三杯の酒をききしる  
 花の合中しるるあらのうら  
 けりあるる酒酔の調をききしる  
 四五の月をききしるる海舟の家

翁 良 景 竿 翁 高 良 景 翁

うつらのいかにききしるる  
 藤の音 花をききしるる  
 花の音 花をききしるる  
 うつらうつらうつらうつら  
 うつらうつらうつらうつら  
 うつらうつらうつらうつら  
 うつらうつらうつらうつら  
 うつらうつらうつらうつら  
 うつらうつらうつらうつら  
 うつらうつらうつらうつら

翁 良 高 景 翁 良 景 翁

おるの家たはるる 破板帳  
 としりしるる 風の 薫

風流 翁

菊他 秋より 花を折る こと  
芳と しのく けり 如の 木 葉  
そと なる ぬき 玉 里 隔 け  
了 市 へ け ち 約 出 へ ち せ ぬ  
棋 け ち 祖 父 へ ち 夫 ち ち 傳 へ  
字 へ ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
梅 へ ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
す へ ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
三 歌 尺 へ ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
俗 へ ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
雪 へ ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
蘇 へ ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

孤松 菅良 柎風 熟華 為 依 良 如 柎 木 端 為 菴

り 畫 へ ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
疾 へ ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
お 花 へ ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
石 へ ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
水 へ ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
や き へ ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
衣 へ ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
牡丹 へ ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
志 傳 へ ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
武 士 へ ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
お の つ へ ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
羽 織 へ ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

松 端 菴 良 依 柎 風 熟 華 為 依 良 如 柎 木 端 為 菴

秋文々松子子からん菘のま  
くくひすくせく、身徳の谷組  
系致すうあをるる久百 香  
出 味の新子くえゆるかや火  
たう 併 併の者く 疎くして  
よく 絶して空ふ 紗魚の白張  
ほくくし 石のうら戸の崩れく  
まくくさく 山もあのかん  
あくくく せもたぐく 袖あて  
黄くくく 山 ぬ 際すく 命

良 瑞 松 風 菊 瑞 風 菊 松

清くく 松家たより せ 妙きくし  
冬 ぬ ぬきくく 子のあきと 禁  
麻子 立 尾 上 の 清 久 回 子 けけ  
夕 月 ち ち 一 二 の 丸 の 伝  
楠 ぬ 紫 人 け け ぬ 紫 の 香  
菊 の つ 枝 末 ち け け の 香  
あ け け 石 子 け け け け け け  
山 八 進 け け け け け け け  
又 け け け け け け け け け  
秋 田 酒 田 の 浪 ま け け け け  
る け け け け け け け け け  
素 け け け け け け け け け

清 風 菊 良 瑞 松 風 菊 瑞 風 菊 松

多敷手美人のかしら善く  
雲まのりらるる誓ひの解し  
八月や申酉の方たつとふく  
戸を敷く破る雪の戸  
干鮎の舟とていふく花あて  
七手のくしけり牛角芽をむす  
性痛しのぼりてかうぬん  
火串さくくす西死鳥は  
扇をいふやきききききき  
ぬし付きていふを結し  
くはくは石の井掘る天乙女  
艶ふる花をけは舞ふいふ

良 英 翁 良 翁 良 英 翁 良 翁

物りまゝの位流すきみし  
まのりらるる誓ひの解し  
一月ハ紺白の袖をいふ  
かきよはけいふくみくし  
夕日夜高く貝と吹く  
木賊く男や葉わすれまん  
くはくはくはくはくはくはく  
り人の子を生き石を岩めれ  
物も流し川上の花  
追まらしむ吸虫のまき  
花の嵐すきききききき

英 翁 良 英 翁 良 翁 良 英 翁 良 翁

起川の麻子ゆつんは小家江  
約ちえりり夕のまの葉  
け細いく度踏のめくしん  
石少く之くしる飛くしの月  
赤清く青花ははるの節よみ  
大の音 絶てハ秋をもとふみ如  
げ高しを念きまを折つん  
雷ゆめぬらハ松の枝くま  
まゝらる 朝のから菜の葉をく  
象のくくき地をえん  
ひんたくも美女とおもふ

清風  
蜀  
嘉英  
曹良  
翁  
良風  
英  
翁  
風  
英  
翁  
良風  
英

紅粉白粉の市の河くそひ  
象のくくハ秋のま踏のまん  
野くく高く象踏の月  
蓮ゆら船の中あまきん  
赤く折くハ萩の雨く干  
象踏のまんハ春のまん  
炎す息まのハ秋のまの  
かひはハ是言ぬくハ飛  
昔くく入くせはハ飛く家  
果のくえ棒くかふるま  
今そくくまを換くま  
二の言ハハまのハ帳くあま

良翁  
風  
良  
英  
風  
翁  
英  
良  
風  
翁  
良  
翁  
風  
英  
翁  
良  
翁  
風  
英

多敷しやる月の十五夜  
金利珍ふは枝の秋の以千僧  
板直る三の棒の木の  
つくしと廿七うに支あつて  
父、娘窟を泣けうす  
しと子と老の海了かの星  
片ふとや浮く上る石上  
ぬきひらの葉を折る山より  
山深きうらうらしみのり方ぬ  
けふふ橋等く猿まき子ん  
くまうらうらしみのり方ぬ  
花と葉のさきさきの種播く

英 翁 風 良 翁 風 良 翁 風 良 翁 風 良 翁

きの甜わしうまの山也

翁

一葉亭無行

さみしれを基にし涼し川  
岸より葉をこぼれゆく舟杭  
瓜とひびきうらやう氣さらて  
果をこぼれひき葉の細花  
牛の子うらやう感ふみ百葉  
雨をこぼれし松の吟  
袋をこぼれし杖やうらやう  
松路ひそく玉井境目  
永未お古ふ寺鐘をいきて

翁 一葉 曾良 川水 翁 翁 水 翁 翁 良 翁

芳と何しする大もつれ 残  
葉の尾と何し住むとかなし  
爪紅しつる双六の 石  
を揚るすしれと火のくひ入る  
杉ふ人子 告る 秋 うき  
多留る舟の月工了 言をれ  
破くしとくえくしてむさく  
花の好もを織する 是れ  
二 深紫いとも玉山うけの塔  
珠多村を浮舟のふのき 宿る  
刀 持する 甲斐の一 札  
藤垣人も通るぬ 扉 不し

水 良 菊 水 茶 良 水 菊 水 良 茶

物さくくしひり削る松の木  
星あかり 髪ハ白髪にかきしや  
集り 遊 女の心をいひ月  
露の滴り 葉もも 柳のしめり  
紫くすくす 柳の葉 後 くるす  
冷 飲 吹 木のけを 屋のかけら  
多し しくし あり 手 万りの 証  
古の友とと 涙をふく ちり  
を 葉 編 する 舟の 葉 合  
を みる くれ 沙 乞の 市の 夕 結 じ  
蝶 拂 の り を 葉 院 の 室  
元 人 を 古 手 懐 紙 の かき くと

茶 菊 良 水 茶 良 水 菊 良 茶



やま久 鳥のまうふ入 お  
ひくくく 聖とこくくく 崎のむ  
山田の 終を けくくく 雨  
良 翁 水

羽尾山舎受阿闍梨の宗院南宮坊主

有くくくく 人の 終を けくくく 州  
川舟の 終を 引くくく 三  
霧の 終を けくくく 三  
清くくく 天を けくくく 三  
おくくく 天を けくくく 三  
終くくく 天を けくくく 三  
梨水 珠妙 珀膏 膏良 蜜丸

百里は 終を 本を けくくく 三  
山を けくく 三 味を けくく 三  
谷 けくく 三 味を けくく 三  
高くく 三 味を けくく 三  
豆 けくく 三 味を けくく 三  
古 けくく 三 味を けくく 三  
多 けくく 三 味を けくく 三  
月 けくく 三 味を けくく 三  
終 けくく 三 味を けくく 三  
中 けくく 三 味を けくく 三  
的 けくく 三 味を けくく 三  
ま けくく 三 味を けくく 三  
翁 丸 翁 水 翁 丸 蜜 丸

汲くいづく醒る丹の  
是哉のくくさすくはわる美  
敵の門子二取の物子く  
かよ清の宮を砂井の地氣をし  
妻と乞やうる可山やのや  
くす空ハ極の枯葉の上をく  
湯の多きくくく物り味き  
籠のきを持たぬ夫を別く  
篠玉とくはく取すのくは  
月山の嵐の風を骨子志は  
海浜の火跡を穢葉の影  
あまのひん様をくく心た

十  
一

丸 水 良 入 壺 丸 水 翁 丸 良 圓 入 丸

あまのひん様をくく心た  
あまのひん様をくく心た  
あまのひん様をくく心た  
あまのひん様をくく心た  
あまのひん様をくく心た  
あまのひん様をくく心た  
あまのひん様をくく心た  
あまのひん様をくく心た  
あまのひん様をくく心た  
あまのひん様をくく心た

水 翁 丸 良 圓 入 丸

あまのひん様をくく心た  
あまのひん様をくく心た  
あまのひん様をくく心た  
あまのひん様をくく心た  
あまのひん様をくく心た  
あまのひん様をくく心た  
あまのひん様をくく心た  
あまのひん様をくく心た  
あまのひん様をくく心た  
あまのひん様をくく心た

丸 水 良 入 壺 丸 水 翁 丸 良 圓 入 丸

瑛子小憐とけし  
山の深き浦之り帆玉船  
前ふみや里ハうらとさ  
栗稗もや毎の齋の喰飽く  
うのらうけつ行る石の戸  
赤櫻と母の記念の極をうれ  
春子踊さう小田の菊油  
此秋の門の極極くうらとさ  
秋のうらとさけしうらとさ  
きぬしハねとさう同しちの隆  
大の女お娘お物うけ  
舞入の花さうさうおおけし

丸良翁 丸良翁 丸良翁 丸良翁 丸良翁

自らの廊ハ柳子焼ける  
冬道のまよ一お子うらとさ  
奈良の秋子巨魁のめる  
はもさう先おとれとや谷揚て  
翁をさううらとさうらとさ  
さうけさハ目をほろろす翁盛水  
愛しし子友を付さく  
子らの虎を 陸小松 系  
堀牛のかくを踏つてさうさ  
翁の機のおれとさうさ  
うけさうさけさうさ  
のさうさ身さう柳のさうさ

丸良翁 丸良翁 丸良翁 丸良翁 丸良翁

江泉のそよぶ陸奥の秋風  
初冬の頃よりさふ氷のためし  
山をふ化す雪の暮智  
尼名男の子をささぐらふ  
ゆきかうしおふおれ橋  
花の耐事とやういふまき  
野々々々々々々々々々

良玉 良玉 良玉 良玉 良玉 良玉 良玉 良玉 良玉 良玉

酒田不玉其袖道に上

河川と山や吹海のけり又深  
海松かゝ候ももむ枕道  
月より関原をかん海おき

不玉 曾良

氏のかすとのかゝり秋風  
さしをほりてやまのこ相  
ゆき花の玉をささふ義の毛  
火を替りける白髪もれは  
海をハミらとさふやかしきうせはあ  
松あさおくる武隈の古を  
子統柳のききききききき  
ちまこの秋のけりかひこと  
お供してゆきふ系も忍ん  
はきの末もみよりの入  
新伝の如葉帯寺の後のち

良玉 良玉 良玉 良玉 良玉 良玉 良玉 良玉 良玉 良玉

くまのつらとまの念  
将の地は痛みの月  
二のつら本魂のくまの風  
すくはのつらきゆの山  
強力り蹴つるつら毎侍の  
枯をゆきむるつら其  
物もつらつらつらつら  
えつらつらつらつら  
つらつらつらつらつら  
月走つらつらつらつら  
つらつらつらつらつら

良玉 良玉 良玉 良玉 良玉 良玉

十  
九

小納 袴をかくる戒の  
象の母のつらつらつら  
つらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつら

良玉 良玉 良玉 良玉 良玉 良玉

又月やらのつらつらつら  
つらつらつらつらつら

良

多きものをもつる桐の一葉  
おと方より食くくらうをさける  
海寺の小舟をたを上の段  
移りゆく舟を山を尺をさる  
松の木下より流るく休換  
夕あらししを吹くくぬ石の底  
豊とくおおく船りりぬ  
さぬくくの坊を起と直くん  
数くくの根をふれ持つて  
後手くくろく香くくく心息  
のくくともお香ハたのきくく

左葉  
曾良  
眠臥  
此竹  
布雲  
石雲  
瓶華  
良葉  
義年  
菊  
葉

麻引くある木の少くさる  
堪あすくくくくぬ香衣  
ふらふ二人の山本の流  
花の冷をまきまき早かきふ  
楳の羽をくくくく鳩鳩のりけ  
まゆを安割吹く流るくし  
あをいりくく人くくのみ

石雲  
曾良  
良菊  
手葉  
良菊  
手葉

早く宵ゆき約季し止欠くし  
いろくくけくく初菊の結  
瀑の踊りくくく布揚る

曾良  
菊

此百十句ありし

秋風おくる父の松から  
かのをを除きつてに拾之し  
跪して後より玉此古巻  
種植す小枝すむの巻を注し  
角のゆくり此ハ長葉あり  
<sup>二</sup>扇をいへる巻をわたりき巻の上  
一むらう鳥人多かりて飛  
去山や遠し小砂を拾ふむ  
科の却りしを巻巻の巻  
巻くしよ百巻の巻を注す  
人ゆきりしき巻の巻

良鳥也右巻良石巻

松柏少枝し風は多し  
子を耐きをくろ巻の床  
吹り去の枝をぬかり現あり  
昔の月山子白あり  
捨皮むく巻の巻は秋巻く  
志く巻し巻は巻巻巻巻  
巻巻の巻巻の巻巻巻巻  
巻巻の巻巻の巻巻巻巻  
かゝる巻し巻巻の巻巻巻巻  
巻巻の巻巻の巻巻巻巻  
巻巻の巻巻の巻巻巻巻  
巻巻の巻巻の巻巻巻巻

良鳥也右巻良石巻

志保し〜ふ名や少松次存芝  
志保し〜ふ名や少松次存芝  
彌るきさひ〜き秋の鼓あ〜む  
よ〜の彌戸を〜刃ぬ久〜れ  
寺〜もや〜之秋を〜もす〜海  
河〜し〜に〜の〜し〜物一〜形  
信あ〜き破〜河け〜る天を拾ひ  
雨〜し〜洲崎の岩を〜し〜ふ  
き〜居〜ら〜朽〜る〜火〜火〜を〜し  
乞含起〜し〜物〜も〜り〜海  
蟻のゆゑ〜て〜八〜室〜子〜首〜之〜

菊  
披墻  
小枝  
谷ト  
蒼生  
志捨  
夕市  
教益  
親生  
曾良  
枝

葉を〜も〜む〜法〜や〜は〜〜〜  
夕雨のす〜玉乾子〜令〜る〜  
子を〜ほ〜え〜つ〜と〜難〜折〜し〜  
侍の〜さ〜く〜も〜了〜す〜の〜ち〜あ〜れ  
そ〜ろ〜舞〜習〜ふ〜末〜の〜世〜と〜あ〜る  
洞子〜さ〜す〜月〜か〜し〜蟻の〜光〜し〜て  
波〜と〜と〜葉〜も〜し〜い〜と〜味〜ふ  
鈴香〜と〜裡〜の〜床〜か〜ま〜く〜洗  
帯〜も〜ぬ〜う〜け〜く〜け〜し〜る〜遊  
禁〜す〜ら〜む〜子〜鹿〜を〜秋〜山〜之  
ゆ〜ら〜む〜清〜あ〜子〜洗〜不〜還〜末  
去〜貢〜捨〜於〜捨〜子〜人〜主〜る

菊  
ト  
枝  
蟻  
親  
市  
蒼  
生  
良  
枝



かゝらそりうに性ありあふ  
一持子折れよあむ三りの月  
秋のあきさく糸屑の以り  
宿ありし之八の袖の言作く  
美しきよさくさ出くく尺む  
マサれ子とのふれい九櫃をき  
身うさくひし伊西の板あ  
改代すもあまやしな  
宜約のさ月北佐方ゆき  
園ゆし互の島ハきれり  
あきさくひしのほとさけ  
大うさハ村さるきさけり

市 唄 生 卜 親 翁 枝 良 壱 親 翁

流うり尺ゆり町のきり  
風送る被りしとほしやれ  
若衣ももり女ももり  
古ふ文子のあしともあしき  
あけの情子舞やほしむ  
きらりかきくきを捨りし  
花やうきりてきを友  
きりのあつた節よふあやう  
うさけくしやさふにの山

市 卜 親 翁 枝 良 壱 親 翁

かゝら流りし  
跡は若きまに料理も瓜蒞子

翁

みーしきまゝに秋のやれ新  
月もゆめゆめまゝに次々  
すきりさひき村れ生垣  
秋後路の門をぬけて樵の音  
小桶の清き水は流るる  
セツヤウのひとあつしと娘の恩  
るさ系ーやうあめらう系  
よみあつしあつしあつし  
ともー清き水は流るる  
風さふく候ーしきまゝに  
村のりま木干干あつし  
ふーいあつしあつし中と縁廻し

一泉  
東林  
ノ松  
竹袁  
孫子  
雲口  
乙州  
如柳  
北枝  
曾良  
流志  
泉

さしめあつしあつしあつし  
系うーしあつしあつし  
あつしあつしあつし  
子の戸はあつしあつし  
柳少ーともーしきまゝに

菊  
枝  
口  
浪生  
良

七月廿六日観生亭

あつしあつしあつしあつし  
あつしあつしあつしあつし  
あつしあつしあつしあつし  
あつしあつしあつしあつし  
あつしあつしあつしあつし

菊  
観生  
曾良  
北枝  
生

響あしくう了女一法純  
夕と経る湯本の峰北出ふら  
二戸子持きて替ふ酒樽  
切ら雨の古ふ鐘もらきれら  
その地を舞う枕かゝらや  
晩降る鈴の音もも響かきや  
あももすむる津雲の船  
肌めきぬ女のかちりゝとまら  
あめりうちたゝ系うつゝあふ  
よまうらる木うら響かす襟のか  
うみあゝ上る塔のあまうほら  
あまはたの松も只四本

翁良枝翁生枝良生翁良枝翁

物あきゆる陣のあまうら  
物さすうらまゝの唾めあふ  
あまうらまゝの月小沙陵  
あまうら花うらまゝ里らうら  
解る翁そまらぬら  
壁の羽やあふねうらうら  
くゝの上うら扱るさうら  
ひきまら木魚うら心角おら  
目鏡うら尺字うらみ海うら  
その片とあまうらの名うらあ  
あまうらあまうらうら石の良枝  
神社の櫓の寢生のうらうら

生枝良生翁良枝翁生枝良生

心ゆくまでしりし初空  
一しんえおんしんしんお技持のれ  
あふく月嵐花の戸降子  
雲しんしん心も枝よ故帳物  
うみきくあや文のねと油の  
入山北いしんしんしんしんしん  
あふしんしんしんしんしんしん  
あふしんしんしんしんしんしん  
甲の毎北中しんしんしんしん  
追剥の破をさしんしんしんしん  
月しんしんしんしんしんしん  
長き歌しんしんしんしんしん

箱 良 枝 箱 生 枝 良 生 箱 良 枝 箱

翠の園より二人、かたがたものこし  
あしとてあしあしあしあしあし  
汗ハあしあしあしあしあしあし  
四九の門しんしんしんしんしん  
齋 平しんしんしんしんしんしん  
長生ハ幾久史の思 源 幸  
あしあしあしあしあしあしあし  
あしあしあしあしあしあしあし  
あしあしあしあしあしあしあし

生 箱 良 枝 箱 生 枝 良 生

あしあしあしあしあしあしあし

箱

ちうくも植し露の秋字  
渡し香留る丘の月うけ  
志付し位くお座しきんま  
海音にまきお傘さし  
ひそくうしひく大手の梅  
きゝのや二ふきのこし  
音刃る油隙とら  
秘是く多まきとまら  
吾子つりたれて傍のふり  
提打も婦女うめりけ  
玉子貫ふく病る山も  
栗の戸ハ納豆しは新し

亭子  
菖  
子  
菖  
子  
菖  
子  
菖  
子  
菖  
子  
菖  
子

妙家あつし竹梅きり  
時最人ハ三子みくぬ鳥  
よきて舟うし月ハ川  
福持ぬ芦花ハもあつし  
古季の軍の骨ハ白暴  
やふ入の時ハ送し  
あまみほひハ髪洗ふし  
うつくしき佛を佛を  
はしりくかちし  
そりけて季の餅搦り  
き  
き  
と  
と

子  
菖  
子  
菖  
子  
菖  
子  
菖  
子  
菖  
子  
菖  
子

三十一

三十一

今利を賜ふる陵の坊  
 竹ひわく割一笈の思ね久  
 本家の早苗もくふ百姓  
 野の力圃を平赤子を四千捨  
 付ぬ敵の治國ハ一き秋  
 貞守くくハ流寇ハ敵千疎  
 守の館く一着かして飛  
 十重二十重ものうけくま御の夜  
 秋葉一葉もをうけく里人  
 旭の本くくもあふと月く長系  
 残光の朝葉くく一卯垣

子 堀 子 堀 子 堀 子 堀 子

山中の温泉

下くくくく蒸気のゆくあつちゆ  
 花吹くくくく山のまきくくめ  
 月くくと角カエ渡踏ぬふて  
 籍くく一くくをやうくしとあふ  
 赤側く機く飛くあふのあ  
 案けくくくくく一の遊花  
 初くは海ゆくくの山ハ春の寺  
 遊女四五人細念くくくくハ  
 昔きくくくハ一を契くくくくく  
 塚ハ割わハ臭くくくく  
 草の系くくくハ中くく飛床ハ

北枝

良枝 弱  
 良枝 弱  
 良枝 弱  
 良枝 弱  
 良枝 弱

先祖の姿を傳へし門  
まののちや北上空かく  
あやうらうら均獲のう  
秋風をよのいふぬ子と  
まらき彼のはく葬れ  
花のよの古くあつた  
まを傳へし言の葉  
長きや志の難波の貝  
浪の小溜子あやうら  
多枝子志の女の枝あ  
うつゝくはくはく霞  
鏡小袖是のうまの古

菟 枝 菟 良 枝 菟 良 枝 菟

非菟人多う人け菟  
あふの基子たのれ  
ゆらけし他つ三の力  
初者の子の枝のゆり  
か細もあやうら伊勢  
花瘡ハ素高り永も  
あうのれくはくはく  
あうのれくはくはく  
あうのれくはくはく  
あうのれくはくはく  
あうのれくはくはく  
あうのれくはくはく  
あうのれくはくはく  
あうのれくはくはく

菟 枝 菟 枝 菟 枝 菟

疎狂人と云生られゆく

執筆

九月八日小却しりの寄紙

題通

一と何れも尺の寄る秋の松の由  
むししの枕の胸を露縁のふ  
紙子もふふとあつたに内灯を  
あつたにむかしむ道のとくふ  
板本を極布の灯を燈守るむ  
念のすくぬるすハおひしけ  
れ候と人々尺さるる又万巻  
吹そくのくす村のまのしき  
蕙のくすくす海に松の松の松

曇夕  
白之  
浅夜  
霜  
胃良  
夕  
通  
良

ほろよあつたにむかしむ道のとくふ  
紙子もふふとあつたに内灯を  
あつたにむかしむ道のとくふ  
板本を極布の灯を燈守るむ  
念のすくぬるすハおひしけ  
れ候と人々尺さるる又万巻  
吹そくのくす村のまのしき  
蕙のくすくす海に松の松の松

本因  
之  
弱  
通  
困  
之  
弱  
夕  
良  
秋



一の丁の室よりあそびしれど  
 ぬきくものむはくは後と記  
 旅うら旅くおもひをぬめ  
 尋ふる無情のあつたの歌  
 茶をたつて人よりほしくす  
 田を買して心ごとくあふ業門  
 知れぬる業は入  
 夕月夜夜をうらうら哀張て  
 するく空ふ秋の嵐 候  
 谷くく新酒を飲とあし  
 くらや過ぎたれうらうら梅上  
 あおれくえやこを送る 釣 湖

通 翁 歌 通 翁 夕 良 夕 翁 通 歌 翁 通

麦もうけし一もとのまき  
 舞はるるさくさく花はり  
 於 蝶 ころころさくさくやのけ

翁 夕 撰 華

九月三日 葛原の歌  
 時雨くくはゆきをきり御如  
 山よりりりりりり色秋のふ  
 初月や先西も星をさらすん  
 波の音すくく人もあつた  
 木を換て枕のさくらさきし  
 風のさくらあつたあつた干 瓜  
 夢のつら味の花をふくむお

不知 荆口 翁 如行 左柳 浅香 斜嶺

己みよやあやよき川むすのゆ  
いしよーお人のあま川さよく  
叙君の面をわきりけりは  
ま川さよの鐘をわよきよ思ひし  
業よめぬるぬのさよーし  
花よきし結きくく苦みれ  
細代の鮭成市あまはけり  
舟の形まきりしけりけり  
上着くらしも松のさよのまね  
花のまね宮の長橋ひらけり  
ぬきよまきりしけりけり

怨風 知 翁 柳 翁 香 岩 知 行 風

さやくあひまきよー言の菊  
まらうよま川言力りあ  
新まきり古年の勢のつかま  
あまきりしけりけり  
酒飲の癖子孫をわきり  
物わきりしけりけり  
是のうらまきりけり  
まきりしけりけり  
二人のあまきり心やあまきり  
けりけり 柳子 精進 けりけり  
兎角 けりけり

菊 左柳 踏通 文鳥 越人 如行 荊口 此筋 木因 銭香 曾良

昔物のしらべの代魚さくら花  
飽くそ一林たらのちり志くして  
歯めけとあれ八貝も吹き  
自空く流中あつてうさし  
あつたふちつ青のふあ  
一棒すつらうの山の家  
培すくひらまきの糖みそ  
茶菜の安けつうはいんく  
村さうの程おはく  
嘶きくり柳のそはた  
二代上手の醫ハあうく  
楊られエくすはとむく

斜 嶺 柳 菊 竹 口 通 人 因 節 良

点作ししらぬ契もさくして  
冬冬花の中おわくその大壺  
葉のまやも不案内あは  
美しくお生れつく物さ  
尾子さうのふ育のまめ  
月影子具足とやとすう  
葉とりねよ一株の葉  
何すも多きをさあさ  
追まもさうささふ葉  
丸餅子折し中し  
物のさけきる母りさ  
花のかけ強倉屋の餅

竹 柳 人 通 菊 節 良 因 竹

梅山子とて跡つてよ 歌 辰

いさ子供とてさあめん玉露  
 折あすさあま桂 心  
 雨等ゆ風やむ法 袖を  
 居ま撲くさむ力のさむら  
 麻の衣さ義かかろ美の衣あ  
 ささくさあまの周 桑  
 雑段のやあまあまあ  
 物さふさあまの樓のささき  
 岩ささく巖斗干さあま海吉妻

良品  
 梢風  
 之遊  
 去芳  
 半浅  
 不  
 菫

はうたさあまけよあの子枕  
 身残さあまのいさあまあ  
 ささくさあまのさあまあ  
 さあまの傍寄さあまあ  
 月入さあまの不二のさあま  
 秋風のすさあまのさあま  
 さあまのさあまのさあま  
 さあまのさあまのさあま  
 雨織 扱くさあまのさあま  
 涙ささく耕す肩をさあま  
 首のさあまのさあまのさあま  
 袖ささくさあまのさあま

風  
 跡  
 菫  
 不  
 風  
 菫  
 菫  
 風  
 菫  
 菫

いよこしめりし奥州の家  
若生し其の幸初はあはれこりれ  
林よりきこし 弦ふ紫の戸  
霜の母と別見は安ふ涙の音  
風許仕上り 涙のみの中子  
幸の中、操娘うひまの娘  
よふ石んこれハ佛きしこく  
瑞陽燈ハ月をとくましこく  
侍の髪 薊 雪の夕々花  
をみまし 一ふめくあつと踏あて  
鬼うしれと 畔 子 網 たる  
生れ未し 燈子の 好 舞の 楽

不 風 菊 菜 花 不 菊 芳 風 菘 不

三十一  
五

白髪多しに和子いそいれ  
右義長の河くさくさくを待  
あつとくさくさくを待

菘 菜 花

霞やををすふあつ 蕪の月  
くさくを待 楳のきこりよ  
曆よむ人ふふ里も安ふたけ  
かこく 牡丹の名を度あつ  
秋く 子守ふつこの上ふり  
扇の角を待ふつ 葉 (

菘 風 麦 良 品 古 芳 半 鏡 梅 額

園 風

三十一  
六

初かみあまを特出し 義  
この籠よりあまの櫛を  
おろしをわらひにまじのけ  
信望の海よりれ素襖をあやした  
かたはれのそを贈る古  
村人ハ舞の町らうとあつて  
鶴江門流をそらうとあ  
造りあまを海に甘ひ  
月もあまの良をふあ  
妹うわ海を納舞の生後  
あまをらすすの世にま  
そはくの糸の衣おを授け

木白 既カ 麦 風 芬 不 孫 力 依 麦 箱

かーりけり 饅頭 飯の  
此ちり餅をのちとて  
肩より持ぬつ 竹のさ  
あまを男に尺をふりか  
あまをねて火の流をわ  
華礼子まほしうの志  
女 嘆 けり 竹の戸の  
信望のいよこ餅を配  
宵中ハあまがらあ  
ととれらる 籠の中  
あまをいふ尺の  
あまをいふ尺の

白 力 飯 白 箱 芬 不 麦 風 飯 白 芥

赤らぐもりーや路、雲  
七より夏をかーる深うさ  
なううてをを河きふ有  
柿の木は枝ももく、子実を打て  
飛てすきさーもや紅紫を  
所り老の踏ちうひるゆ侍ひ  
水斗の星をつてむ村も  
庭の瓜あうてをくゆつん  
松ハ一本山の神し  
乞念ーるもをする落すれ  
鏡子しし遊了るも山しあふ  
春ゆりわらしし霞のちしくそ

力 芳 翁 風 疎 白 秋 若 麦 翁 風 疎

とくぬ方此歎をそつむ  
此泣を火を棒ゆふひる位  
赤ぬーる未で此境の名を向  
引うのく芳翁の語子まけり  
月の夜を拭てもうふふ翁  
月の赤志うみー旅と美ー大  
きぬてあしをのりさうひ

力 翁 風 若 白 不 麦

赤ら今ゆくや水斗の星のお  
翁の言水あつあつあ橋  
一つうの柳の木をちかすう

百歳  
式之  
翁

万々々々千花し田圃をうけし  
聖の房をゆくくまの月  
院おし強ふ家の名手  
の房のすくぬのすれ大さくひ  
奈良の小称直とあよりし  
提灯を燈きしひし隆の房  
残子羽おをかしめほりき  
浦くくくくくくくくくくく  
古ふ名はのなまきくくく  
る向の向をくくくくくく  
志川くくくくくく青山の秋  
子習のなをくくくくくく

若牛 村被 楓市 梅顔 牛 果 市 菊

瓶子うくくくくくくく  
杖意くくくくくくく  
中の末くくくくくくく  
み中の屏風くくくくくく  
仲くくくくくくく  
夜更のくくくくくく  
くくくくくくくくくく  
あくくくくくくくく  
柴くくくくくくく  
ゆりの積積の月くくく  
福妻くくくくくくく

杖 果 市 菊 牛 被 市 被



高千穂くやまもの、紋  
子供お侍、かまを切、まひて  
子木のひがし、ふす、株、札  
物名の下、おのゑ、けい、を、けい、けい、  
帯、を、ま、わ、れ、ハ、の、れ、著、を、と、る、  
新、れ、く、く、ふ、も、赤、の、屋、あ、れ、や  
桐、お、法、子、も、ゆ、う、湯、卷、  
砂、ま、の、耐、物、や、ゆ、う、お、ら、提、下  
袴、子、け、ら、す、う、け、一、う、さ、と

菓、翁、く、弱、翁、被、案、市

く、く、く、風、き、の、み、さ、い、程、き、い

玄、舟

虎、首、の、お、ね、ま、う、く、み、く、ま、  
十、高、登、も、凡、さ、米、の、京、一、く、  
く、ろ、り、ゆ、て、ま、ま、旅、の、ゆ、と、ま、み  
く、ふ、の、月、雪、の、もの、ハ、山、の、積、  
よ、の、岩、阻、子、秋、の、え、お、ね、  
一、株、の、花、ハ、物、子、似、く、ら、う、れ、  
人、ん、の、ハ、一、く、う、ま、の、後、病、  
江、を、ハ、志、く、ま、く、破、を、あ、く、さ、け、  
右、も、い、く、く、も、唯、造、う、し、  
く、ま、お、る、重、く、う、に、の、け、く、ま、  
尾、上、子、く、う、う、後、の、つ、ま、そ、め、  
東、玉、の、ゆ、く、お、男、も、は、そ、く、ま、

舟、竹、翁、竹、翁、竹、翁、竹、翁、竹、翁

戸の月を待しのり 永  
 秋風千木疎 似も吹志り  
 垂ふふ立 不致 志方の 陶 了  
 節さうり 志賀の 田の ぬきり 是く  
 ぶく おうれ 久む 蝶さ あり 虫  
 去のゆえ 長 柄の 傘の 紐の 玉 中  
 髪斗り 毛付 けり 髪 けり けり 紋  
 白粉 けり 代き けり 舞の 娘 けり 良  
 珠さ けり 業き けり けり けり けり  
 風く けり 納 けり 火の けり けり  
 けり けり けり 梅の けり けり

竹 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊

月夜をあの 娘の色 玉うり 菊  
 性のか けり けり けり けり 菊  
 首末 けり けり けり けり 菊  
 木下 けり けり けり けり 菊  
 とき けり けり けり けり 菊  
 せ けり けり けり けり 菊  
 す けり けり けり けり 菊  
 つ けり けり 菊  
 雨く けり けり けり 菊

落沾 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊

しらねのきりぎりすの聲の煙  
夕合ふ小結の糸の月おとろ  
秋の夕のきりぎりすの聲の煙  
菅良

西のくはねとあふれつらふの  
ゆらぐはつこも何れか入るる  
焚ゆるを又きくひらひのこ  
市の子供のきりぎりすの聲の煙  
白の夕のきりぎりすの聲の煙  
菅良

田舎のきりぎりすの聲の煙  
ゆらぐはつこも何れか入るる  
焚ゆるを又きくひらひのこ  
市の子供のきりぎりすの聲の煙  
白の夕のきりぎりすの聲の煙

松衣早苗うつる食乞む  
いよわのれ越ゆやれおすれ  
ま引のきりぎりすの聲の煙  
菅良

風流年とし  
あのかくも宝あつる柳の  
ゆらぐはつこも何れか入るる  
風流  
菅良

盛徳年とし  
風のきりぎりすの聲の煙  
小家の新をほふ白雨  
菅良

物もろく棒ハさ方子埋れた

木端

六月十五日青島函令書

菊

吹しきや海へ入らるるもみ川

月をゆりあそび浪の浮海松

黒野の森ゆくの夜の望のり

胸もとハ胸子もあしむきれ

波とらのおもひ付し市を待

新しきあそびする音の油火

不操娘のこころも意も忘

今道 不玉 定連 曾良 任曉 扇風

さよなられよ松子 夢野山の雪

會覺

杉の葉のをさくさく三日月

菊

秋休みの手袋のりを携う

不玉

以て踊らるる万葉の

曾良

葉欄子つらき花をもち

菊

葉のすれを揚うけらる月

棟雪

植うけられたる秋のいそぎ

更也

万のりめけしき葉のい

曾良

菊を一夜にめし

小春

之胸のちのりあそびる秋の

菊

ゆき月夜山底さき

菊

初冬の山あり方北のけしき  
 にしらりのこもり水のきこ  
 物とを扇引さくそのけしき  
 吹ふと方子きき心ゆく

曾良  
 小枝  
 篇  
 小枝

送子  
 秋のうねり名しの答返り  
 暮らるる霜やうさぎのけしき  
 けしきととらつれきこも秋の風  
 吹綿の買ひおきくけしき

木因  
 菊  
 菊  
 光澤

元禄三庚午

二月のひ

古井の煙草入り  
 湯たのほほふく足さくみか  
 指さす方子月ひらむ  
 梢より疎の枝をかきさる  
 香をよめ吹折風ゆめさる  
 懐しのに木のきこぬすけ  
 世をよめとといのらきさる  
 けしきと妹は後をよめさる

菊  
 草木  
 百葉  
 村鼓  
 式之  
 梅額  
 一桐  
 槐市  
 被



けりちりあつる智恵のこころ  
まを河の杖ささるるまのた  
水子くまをのま子  
香之相

蜀

木のまにけいと鱈も梅のふ  
西のま子子し能くまあ  
松人のま子まのま子ま  
まのま子まのま子ま  
月やらして後の内裡の司る  
物印つくる松のま子ま  
露まの三葉物子秋のま子

珠碩  
水  
蜀  
水  
蜀  
水  
蜀

入也子流流の涌流のま子  
中まのま子のま子  
まのま子のま子  
おまのま子のま子  
物まのま子のま子  
力尺のま子のま子  
秋風のま子のま子  
月まのま子のま子  
子まのま子のま子  
眼まのま子のま子  
何まのま子のま子

碩水蜀  
碩水蜀  
碩水蜀  
碩水蜀  
碩水蜀  
碩水蜀  
碩水蜀

又さへいふにやうにさへいふに  
くすのりやうにさへいふに  
懸ねんといふやうにさへいふに  
手朱弓紀の筆やうにさへいふに  
酒し元くすのりやうにさへいふに  
双六の目と取くすのりやうにさへいふに  
飯の持竹やうにさへいふに  
中（に）去るやうにさへいふに  
家急い里れやうにさへいふに  
みくわれくすのりやうにさへいふに  
月ねくすのりやうにさへいふに  
花すきやうにさへいふに

水 霜 水 霜 水 霜 水 霜 水 霜

只四方あるやうにさへいふに  
一葉の深むやうにさへいふに  
醫者の美名のやうにさへいふに  
花咲の芽時やうにさへいふに  
地りきくすのりやうにさへいふに

水 霜 水 霜 水 霜

木のよに計と能くさくすのり  
のよさくすのりやうにさへいふに  
煙陣とさくすのりやうにさへいふに  
あけさくすのりやうにさへいふに  
多様さくすのりやうにさへいふに

霜 洞 去 芳 良 品 風 麦 霜



精のふくむる最の燈の宮  
石燈の燈目とてしる昔の家  
魚よりれしる鮒の多儀ホ  
お宿の志はしるやとおもふ  
木幡阿しるのまの夕られ  
香をたると人のまのふた  
井戸のまのふた切  
深しるの深しるのふた  
むしりもたしるのふた  
高しるのまのふた  
非りしるの船母子の左刀  
丈んちしるの紅つけりしるのふた

半袋 芳 麦 菊 不 洞 菊 麦 芳 不 麦 菊

白のふくむる二の燈の宮  
湯のふくむるに揚をいふすは  
すけふくむるのまのふた  
そのふたの端のふたのふた  
ひとくのまのふたのふた  
鮒の家とていふまのふた  
まのふたのふたのふた  
佛のふたのふたのふた  
源のふたのふたのふた  
ひらまのふたのふたのふた  
まのふたのふたのふた  
夕のふたのふたのふた

三箇 菊 不 洞 菊 麦 芳 不 麦 菊

春の介しう人いらのあし  
きく菊のちの中と名をつけし  
能く手ゆいんのおうけさ  
り入る二葉の菊も探さず  
淵ささくあしぬ先の方  
海さく花手流もあられすや  
きしわく月くあはし

菊 麦 不 卷 洞 菊 芳

伊賀の山中

種芽や花のさうくに受りし  
火焼きしけい風くさ  
酒母のわらも花さきと花さ

菊 半 雲 芳

秋のくさふ草のあし  
まゆの七の起あし葉花  
ひさこの札を付し  
秋風と柱の戸さる縁入る  
小傳のうさきわくさす  
安(と夫洲の河系から流る  
あかしの抄子もつ川のこ  
手杖の男もくし三輪  
人さしきくうた名はし  
萱州の色もかきぬ色  
秋之際れ啼死す  
内音く石家ねさく風の方

不 菊 孫 不 菊 孫 菊 不 菊 孫 不 菊 孫 不 菊 孫 不 菊 孫

こちれし喜ぶ屋籠の香  
新しみの香のまじりて  
後のつまらぬあのかく  
猫の目れらる柿核よす  
河舟のまよひの織  
かろくうと病人の  
ゆいしつ  
けくも  
まこと  
おとす

芳 孫 翁 不 翁 村 不 芳 孫 翁 芳

いと  
田舎の  
風  
お  
死  
弟  
長  
つ

不 芳 孫 翁 不 翁 村 不

つ

翁

せえて海一さきゆのまき 燈  
初月の影長繁うたへいし  
石子いりしれあひくくし  
松の本も松舟さそふおし  
磯とやめし磯の島と海  
くうれいりあれしを結  
夫數千腕のさきくを  
古海古の妙を指し  
林の棠くく重樹し  
まらぬきふしあしわら  
くきまれあひはらわくち  
嵐ふくちをくくく

奇香

尚白

自咲

通香

松洞

玉

咲

箱

宣考

白

洞

江

山

白

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

三陰ちうく 蘇も踏もつ  
 予き人をとらえていそしめ月のあ  
 大勢の 素し ねふたをん 女  
 一燈や 二条ゆきゆの小細 女  
 実の子 告こしういそめ山 山  
 こらへくしとあさまのきこふと 甲  
 畜まをりふて 陶の 鱈くら  
 疎おの 伯父の ねくらく 尺をり  
 ねの 妹の 子をも 養ふ 来り  
 採くしむ 妻の 戸を ぬき 棒に  
 うやうやうとくくくくく の 物 巻

白 翁 就 美 香 江 白 洞 者 白 委

市中、物の白のやまの月  
 鬼一くくくくくくくくくく  
 二の白字も 果し 棒に かく  
 灰くらららららららららら 一 投  
 此 筋ハ ねも ぐくくくくくくく  
 只 去 拍子 子 子 子 子 子 子 子  
 多 多 多 多 多 多 多 多 多 多  
 花 花 花 花 花 花 花 花 花 花  
 是 花 花 花 花 花 花 花 花 花 花  
 能 中 七 尾 尾 尾 尾 尾 尾 尾  
 魚 骨 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志

凡 犯 翁 吉 来 翁 花 翁 来 翁 花 翁 来 翁 花 翁

待人入し小御門の  
之く屏風を伝ふ女子  
扇屋ハ外ハ笑子ハ心  
尚更ハ定を吹流す夕  
俣 良 年 々 寺 々 陶 々  
秋の月 秋の月  
手 一斗の地子くうに  
五ハハ生木つけくあ  
之 袋 少くも 思ふく  
遠立しくやふたの刀 持  
丁 頼 子 ち ち ち ち ち  
戸 障 子 ち ち ち ち ち

末 末 末 末 末 末 末 末

了丹きもういりくつく  
らうしと字體を地ハ月夜  
夢をふくひく起し秋  
手やにらん心 外前し  
ゆ ち ち ち ち ち ち ち  
学 院 子 ち ち ち ち ち  
い の ち ち ち ち ち ち  
き ち ち ち ち ち ち ち  
く ち ち ち ち ち ち ち  
何 ち ち ち ち ち ち ち  
お ち ち ち ち ち ち ち  
ま の ち ち ち ち ち ち ち

末 末 末 末 末 末 末 末

五十三

かきくくくくくくくくくくくく

末

灰け桶の空やみきりく

ん兆

油うきりして青痛する秋

菊

新しきみあきりく月影

野水

あきりくくくくくくくく

玄素

子代経く物もきりく

菊

くくくくくくくくくく

水

系りて航りくくくく

末

摩きりくくくくくくく

水

夕夕くくくくくくく

水

虫の口をやもうけく

菊

物思ひくくくくくく

水

むくくくくくくく

末

きりくくくくくく

菊

ゆりゆりくくくく

水

所内の秋もくくく

末

何をもくくくくく

水

花とちりくくく

菊

木色くくくくく

水

物くくくくく

末

紫さくくく

水

くくくくく

末

三

五十一

秋の我老くしりありし  
 才さしお女の智もはらふて  
 何おりの心 糧のふく  
 子有無言の豊海の沙窟  
 人ともすれし 阿ふふのあ  
 こそつふ子自惚いそて越らん  
 又と大るのれ飲をえおす  
 堤より阿の春やまきし  
 物か茂の緑の影を  
 雨のやりののやる 迅速  
 直脚る春浪のめれとささ

菊 水 末 水 菊 水 菊 水 菊 水 菊 水 菊 水 菊 水

五十四

秋まて干瓜くき 南亭子之田  
 早稲穂をすく 阿の阿の阿の阿の  
 人ごりてまの 阿の阿の阿の阿の  
 猪棚とまの 阿の阿の阿の阿の  
 虎首はまの 阿の阿の阿の阿の  
 春捉し舟のこけりも拾らん

水 末 水

及肩

秋まて干瓜くき 南亭子之田  
 早稲穂をすく 阿の阿の阿の阿の  
 人ごりてまの 阿の阿の阿の阿の  
 猪棚とまの 阿の阿の阿の阿の  
 虎首はまの 阿の阿の阿の阿の  
 春捉し舟のこけりも拾らん

水 末 水

五十四



とくしぬ路の安もたるとは  
す急なふ新炊のよ百景  
非の怖の娘のゆき  
うけし至合明の常と止は  
肌寒くしと橋変けし  
舟の舟海とせ所き色唱  
茶をも静多くと寺の住人  
上張り新ぬすむ印のし  
ぬ新す新ぬすむ印のし  
とくしぬ路の安もたるとは  
す急なふ新炊のよ百景  
非の怖の娘のゆき  
うけし至合明の常と止は  
肌寒くしと橋変けし  
舟の舟海とせ所き色唱  
茶をも静多くと寺の住人  
上張り新ぬすむ印のし  
ぬ新す新ぬすむ印のし

志 是 碩 肩 房 志 系 碩 是 系 房 志

羽折橋の備ありし  
行りて新起習ふよ  
筆をもたしむらひの味  
母親の妙をてて入新  
是のすしむらひの味  
は戸店も持て在るの門  
麦と葱と魚と咽のかき  
級引の町と屋とさし  
香の小向す去す  
志のしとかひの行と  
とくしぬ路の安もたるとは  
す急なふ新炊のよ百景  
非の怖の娘のゆき  
うけし至合明の常と止は  
肌寒くしと橋変けし  
舟の舟海とせ所き色唱  
茶をも静多くと寺の住人  
上張り新ぬすむ印のし  
ぬ新す新ぬすむ印のし

肩 是 碩 房 志 系 碩 是 系 房 志

五十一

五十一

石地の坂を帰るや切  
情はを聲の太工唄へ  
あふをを跡をまの借上  
那の度と事しちを柱屋に  
かゝしとすまのゆけの

五  
十  
六

月見すもやまきおれ  
庭の柳の影を  
火桶ぬぐ直の  
おとこの古木枝末  
尾のめし

百七  
字堂へ  
雨のく  
一切  
さ  
い  
あ  
月のお  
枯枝か  
侍者  
大工  
三

五  
十  
六

ハさうくうらやまの吹鳴  
鳥鳴のうらやまの風ささ  
打のうらやまの風ささ  
商人の橋をささる 橋 秤  
物ささるやまの風ささ  
蒜のささるやまの風ささ  
雲ささるやまの風ささ  
畑のささるやまの風ささ  
言ささるやまの風ささ  
若菜のささるやまの風ささ  
随分のささるやまの風ささ  
言ささるやまの風ささ

霜 白 霜 白 霜 白 霜 白 霜 白 霜 白

ささるやまの風ささ  
あけのささるやまの風ささ  
小ささるやまの風ささ  
ささるやまの風ささ  
ささるやまの風ささ  
ささるやまの風ささ  
ささるやまの風ささ

霜 白 霜 白 霜 白 霜 白

白雲ゆく枕のうらやまの風  
入るやまの風ささるやまの風  
あけのささるやまの風ささ

霜 白 霜 白 霜 白 霜 白

かり梅くさるかーくさの葉  
河風や舟の心代のうらぐしと  
麦の小いねをももく久其  
喬さし一志を降る破まそ  
願わらうや急解の鳥  
とー織の帯美しく細と欠て  
久ーき張の歩りお庭ーき  
山さみの池のゆらぐら 花  
かふと音すの物も能く  
月くけし舟のまをこゆいけ  
船も能く語すくつ  
物うさも布子のねふま風

菟 菟 菟 菟 菟 菟 菟 菟

又と浮生の女侯あかすは  
時しと花の咲くぬ新 鳥  
登るあわししてや在うこよく

菟 菟 菟

あしとむしとさすの月の雪  
舟をあしと置くくさすあ  
ひくわし咲も梅ぬ花の葉す  
隅さうけけらるるのせはーき  
とらくとねさし直る智の破  
珠とくぬさくまきりうけ  
赤ものま割る秋のころるよ

菟  
成秀 踏通 文草 惟然 猪脛 正則

石の多石の書けきよむ  
影の森を足りてきよむ  
ふす月ゆるしきや時向う  
拍子木子物ふ位のちつれ  
流るる石のつる管の大作  
月影千の所 玉の向の上  
只ちりしときりす  
粉こまふはうら秋をあら  
祭の白髪をむね見けし  
手しりあふり友の歌  
きつる身をきこぬ妻の  
きの葉のふかきを吹雪

楚江 藤重 葦香 鬼苓 正秀 別 重氏 重古 菊 子 則 睡

さやくとものちりきあふし  
あけきつみさうら戸をたし  
ひらひらのふりきよて木よ  
汗をきよふ人あふりきよて  
せめてさけし木管放さす  
風止るまふりきよて木よ  
虫一しりあふりおほい  
けしりあふりおほい  
月尺をゆししやうし松立  
秋風子細の思焼石の電  
葉のくねのメさきき  
支能あふりあふりあふり

正幸 江 苓 美 然 成 通 菜 学 苓 睡 通

あはれそふた刀の反方を尺よ  
長楊子詔古意を打とくき  
時き 時き 時き 時き 時き  
職人の不ゆいさき 時き 時き  
南おもしし子矢とむさき

重威  
柘沅  
時  
結玉  
玉

亨の明七殿ひぬ初しと行  
一吹風は本葉まのやうな  
役引の都のうめと川とて  
狸も怖す藤とく のろ  
まのう戸のきとひくく 骨の月

去来  
翁  
史邦  
史邦  
翁

人子もくねい名物の梨  
きふくく 豊後おのしく秋をり  
とねくくくくくくくくくく  
何のりもききのくくくく  
里んくくくくくくくくく  
わつとくくくくくくくく  
莫ききくくくくくくく  
坂物えわのあまきりくく  
三里あまのあまきりくく  
時きとくくくくくくく  
さー本付くくくくく  
若ふくくくくくくく

末  
邦  
邦  
末  
翁  
翁  
末  
翁  
翁  
末  
翁  
翁  
末  
翁  
翁

ひらり草りしと野の枝に  
一対子二対の物もさきとよ  
おききしと草もあふふ山風  
火もさしにさきれはあつ噂の  
ほしきいしとれもさきいし  
瘦骨のさき起直くらふさ  
隙をうけてなひふこむ  
しと人を松敷地より潜るせん  
そやさしりれぬ刀さしおす  
せしけし松へ隙をかぶらし  
おもひ切らる死とさし尺よ  
暮天子まの月のかげにけ

末 秋 結 末 翁 秋 翁 末 秋 結 末

ゆゑに秋のほほや妙雲  
葉の戸や草もまぬすかれてさ  
布子さあふふ他のみとせ  
押合して宿しは又も何後枕  
あふらさしとれまこさあふ  
一か月の秋はつとむの  
秋花の古葉もさきもさき

秋 結 末 翁 秋 翁

文章

引起すさきのすきや野の月  
柳の首葉をささす葉付  
民さすの柳の葉をさす

支考 翁

破山のけの鳩の鳴声  
霜し長き松のけの金の由  
残すふそくく種ふ差の結  
人の尺ぬ対（ハ）位物おもひ  
こふいも舟子ゆり起す言  
山の百千の穂のさきさる枝つき  
尾張をくつす本宮の太根  
破張の差破いふくはさき  
可（ハ）けいしる尺の巻の火  
着るくくくあまきく人を尺を魚  
湯の時智る（ハ）言の月  
糸筒を知り念する秋の風

史邦  
古来  
野重  
為  
学  
秋  
箱  
本  
学  
者  
翁

虫の鳴くお虎をこくく  
岩の吠を松西人もあくく  
舟のあ（ハ）くくく松本の喜  
水の文呂杖さくく結るを  
蟹のわくくく白くあ（ハ）手  
酒入のら（ハ）くく破新けさき  
物のけ（ハ）くくあむり寺  
く結（ハ）くくくあむり寺  
縁おとくくくくく直（ハ）ん  
扱きくし桐の林もま（ハ）ん  
けふの結くくくあ（ハ）ん  
かけあ（ハ）くくく通（ハ）る

秋  
本  
者  
学  
翁  
箱  
本  
学  
者  
翁

三

六

三

六



夕月をとりて一見習ふ山の端に  
壱の佛にけふの河をこし  
垣下は湯屋のおれ花吹雪  
小堂のむらぎの干場かたれ  
傘をさすおれも老のせほやれ  
障一はもも一はぬ斎のり  
あちちを掃りあつてをうら  
何れもろやてあつて陽光

末 壱 翁 秋 子 考 壱 末 秋

きつしよの庭ゆけし降雲外

丈草

ちりちり光る糠の埋火  
餘ひく仲の一浪家ゆけし  
苗栽袖の砂苗の松  
清くけい入る月のお志み  
あつちももも小娘の情子  
うけの心もももぬ初存  
戸尻のつらつらうのう  
甲富の宮もも梅田の丘堤  
かつた魚もももあきの修行人  
つ子はる多難やもも二階壺  
こもも火のももも舟のこもも  
あつちやあつちももも月の朝

末 浮 翁 末 子 翁 浮 子 末 氣 彈 翁 去 来

青く水宮を結ぶうねる  
踊場をかくし長吏の三子  
ふさけし袖を引さく  
舟子に紫束のぬき花  
さく木の花のゆふ宣  
今川の武威を蔽ふ  
浪し多きすの史の不死  
張籠り五百をうけ  
月の中の謂れそふ  
河端の埃掃く  
死をこころ  
月の中の謂れそふ

字 翁 浮 字 末 浮 翁 末 字 翁 浮 字

内裏の帳子入し  
萩垣の川をさう  
傘取やう  
抛灯さう  
堀かしの底  
肥て  
ひく  
花咲  
地のふ

末 翁 浮 字 末 浮 翁 末 字 翁 浮 字

沙貝子由京柳丸無引

半りそ形も友や手わすれ  
おろし去民の物納  
よる光る世のかけ系  
やの夜もくおもか  
お中しよより月の人  
秋つよお虫ら心  
実入るよる朝の子  
里らるくある下  
お一割しおれ  
奉加しある倍  
去く川や岸の去る

示石 元兆 生来 系柳丸 乙州 史邦 玄哉 石 末

右とひくも荊棘  
洗濯る居れ何く  
猫のひくも此  
与え上ら下と  
これ去る張の  
お幾人よる名  
まの海をく  
屋らるお  
向あるく  
米よよ  
夕と  
くく

州丸 石 好春 邦 末 丸 宗 引

おきえんくつ 一くきんくつ  
朝の甲おおてし 意一き  
首とくるとくつ 一くおれ物  
那中くけつ 珠のまけ  
月細く少雨のぬるる地花  
幸ん多ア 以才芽 後してふ  
花と子と世を 夢の家 達して  
後のおおきく 一くつ 一くの新  
後くもらひく 一くふ子 龍求ぬ  
ふえこの 取の風 一くけ  
去白く 一く花を 尺くむ 花 毒

末 秋 石 春 秋 龍 石 末 丸

かきくこく 一くあくる 一く扇の 羽を心

秋

いふく 一くぬん 一くおきく 一くし 一くまの 学  
くく 一くれ 一くア 一く樽の 目をと 一くた 一くあ  
幅端の 長を 一くつ 一くを 一くさ 一くわ 一く  
花 一くく 一く時 一く向 一くし 一く砂 一くれ 一くひ 一くの本 一くは  
た 一くふ 一くお 一くを 一くと 一くわ 一くる 一くま 一く子  
一くの 一く戸 一くや 一くを 一くさ 一くして 一くは 一くく 一くの 一く海  
一くの 一く子 一くの 一くさ 一くる 一く水 一く桶 一くの 一く月

珠 頌  
翁  
踏 通  
翁  
園 女  
翁  
乙 州

月代や藤のまき置やのや  
 萩さくけさるいさり於  
 榊枝や鞠のうされぬか  
 秋丸く風千尋にさう門  
 玉のうけ入付百の荷を付し  
 赤人もと一し名の酒探  
 去意くさふらぬの振

箱  
 正  
 珠  
 之  
 箱  
 珠  
 箱

元禄四年未

何れも尺のちりさきさき  
 直のわさるめさりひく  
 如猫手世に猫通事  
 何れもすれさきぬ張の月  
 釣ふらさるぬ糸瓜か  
 仁といされさ後さき  
 算入る差をさおのさ  
 是る古風の跡の奥  
 取れさきさき付て  
 取れさきさき付て  
 此里手お傳へさる

珠通  
 絨香  
 箱  
 此箱  
 子川  
 執事  
 箱  
 箱  
 箱  
 箱

解 備 を く 鳴 月 の 虫  
は っ っ と 夢 庭 柏 の 家 の 音  
一 ち 色 何 ぐ っ 何 此 物 の 味  
お 子 八 塩 庭 々 々 々 物 々 々  
丸 ぐ っ 好 っ っ っ 々 々 々  
粒 粒 々 々 々 々 々 々 々 々 々  
二 石 の 上 々 々 々 々 々 々 々 々  
ひ え ん 子 入 と 種 々 々 々  
り ち 々 々 中 に 々 々 々 々 々 々  
い 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々  
え 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

通 川 美 筋 翁 通 川 翁 通 筋 川 美

人 の 々 々 々 々 々 々 々 々 々  
か っ っ っ 々 々 々 々 々 々 々  
飛 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々  
自 の 々 々 々 々 々 々 々 々 々  
柄 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々  
宿 人 の 々 々 々 々 々 々 々 々  
々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々  
何 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々  
堤 の 々 々 々 々 々 々 々 々 々  
ゆ け 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々  
赤 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々  
花 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

翁 通 筋 川 通 翁 川 美 筋 翁 通 川 翁 通 筋 川 美

くらくすきふきくくらの歌 色

梅屋菜やうこのたのとりけ 菊  
望海くくくくくくくくくくく 乙州  
雪花ゆゆ山田よき林花あれや 珠碩  
志くふいふくくくくくくくく 素男  
片隅子出出うくくくくくくく 州  
二能の定ハくくくくくくく 菊  
秋やう勢の法をくくくくくく 菊  
福の紫のひのちのくくくくく 菊  
貴人のけくくくくくくくく 菊

曲義政くと呼あくくくくく 州  
卯の刻の箕ふ子葉ふ小西方 碩  
けみきくくくくくくくくくく 州  
若林のれくくくくくくくくく 州  
雀うくくくくくくくくくくく 初月  
懐くくくくくくくくくくくく 凡兆  
ゆきくくくくくくくくくくく 州  
捨の柄くくくくくくくくくく 吉来  
原くくくくくくくくくくくく 州  
衣笠くくくくくくくくくくく 曾良

葉をくわくわく入口の杉  
 掃きまわして清くををわからぬ  
 石のくわくわくをすくわく  
 肉くわくわく甚の甚を請ふ  
 けくわくわく花の帰る茅畑  
 蝶の子々待たぬあくわく秋の風  
 菖蒲のくわくわく直のゆもけ  
 ゆらぎぬくわく花のよのね  
 ちの物かゝる花の深さよ  
 振りゆけくわく杖のくわくわく  
 舞の利便を何のくわくわん  
 自化のくわくわんくわくわん

山 通 良 山 良 通 山 良 通 山  
 踏通 踏山

月とくわくわくくわんくわん  
 移をを破のゆくわくわん  
 たり種をを君はわんわん  
 古葉の地はををわんわん  
 海ををわんわんわんわん  
 形代をを生勝若くわんわん  
 けくわくわんわんわんわん  
 杉おとくわくわんわんわん  
 かくわんわんわんわんわん

通 山 良 通 山 良 通 山 良 通 山



まゝ物ねらひしき世一人  
以てをいんとせれはとまらる  
おぼしめし陶の中の戸のゆら  
松平目をさす深きの夕月  
面のきりしき音の集  
火を焚ハ岩の洞もみえ  
ふと半千、跡は明  
おとろふ父の白髪を尋らうけ  
折子のきりしき字の物  
入さし改まる芳名ゆきの  
何、何やまきのしき

山翁 山通 翁良 通良 翁山

蛇あゝゆき中初秋のきぬ  
葛もよう吹かひしき  
小神もさしぬきかけ  
物しきまきる魚の  
一通りみえぬくもる  
出さるしと背中おす  
歩めしとれぬ人を思ひ  
自らはひしき  
物干のさつたけし危  
んはしき。案の小  
夕月音松管音しき

野童 翁 踏通 史邦 史草 通 翁 通 翁 通 翁

六十一

泥抄かきすす子乙女。たれ  
不佛、いりきりけぬあふらう  
牛の骨、し牛、代、とや  
海、の、体、か、ま、く、砂、け、て、波、師、く  
室、の、八、島、に、あ、る、の、所、に、つ  
み、ら、れ、く、ハ、ち、う、う、月、の、さ、ら、ん、  
二 唾、の、舌、似、す、る、く、ら、の、黄、毛、  
餅、子、の、友、を、ほ、く、ら、ま、ま、の、南  
系、少、ち、う、に、ま、あ、る、を、も、積  
物、に、は、れ、ま、い、ち、ま、の、形、も、く  
疼、し、て、ま、る、治、の、あ、ま、さ、よ  
行、足、つ、拾、ひ、は、平、の、古、子、履

通学 翁 通学 翁 通学 翁 通学 翁

ゆ、う、ゆ、う、と、ま、ま、り、ゆ、う、  
供、物、を、く、ま、し、の、智、の、部、し  
畑、の、中、の、首、の、い、系、つ、り  
嵐、れ、舟、に、懸、ち、の、入、り、夕、月、夜  
松、を、く、懸、ち、の、く、ぬ、あ、け、さ  
や、さ、し、け、る、ま、あ、か、う、を、あ、れ、物  
ゆ、う、の、お、向、の、ま、ま、さ、ま、い、  
お、ま、ま、り、し、ゆ、う、と、ま、ま、り、  
ゆ、う、の、中、の、お、あ、ま、り、不、福  
は、島、も、所、例、を、り、ま、あ、け、し  
飯、芭、ら、く、く、昔、ま、い、の、上  
佛、の、ま、か、ら、の、ま、あ、ま、り、ま、あ、り、

通学 翁 通学 翁 通学 翁 通学 翁

業を以てむ教は一なるを

執筆

佛の如く此の諸を教へてや

標志

月を以てして其の如く

正身

教の如く其の業を以てして

呂房

子持 華の如く其の如く

教子

度 其の如く其の如く

篇

又 其の如く其の如く

及肩

又 其の如く其の如く

楚に

之の如く其の如く

志

山 其の如く其の如く

其

狂 其の如く其の如く

翁

其 其の如く其の如く

子

小 其の如く其の如く

房

名 其の如く其の如く

美

其 其の如く其の如く

以

か 其の如く其の如く

翁

手 其の如く其の如く

志

其 其の如く其の如く

肩

か 其の如く其の如く

房

二 其の如く其の如く

子

又 其の如く其の如く

江

其 其の如く其の如く

佛

二

比ふを看て細くさけり  
臨泉を物新くす  
藤田のたぐ  
麻のたぐり  
おとくさ  
名跡を情む  
みらたぐ  
こら  
おとく  
一様  
淨瑠璃  
凡す

子 房 子 吟 志 房 子 房 子 房 子

百千のり  
待義了  
海

子 房 子

牛形屋  
正 権  
海志  
扁  
く  
草  
及

正 権 史 邦 文 草 吉 来 野 童 正 秀

正 秀

遊りの雲もあむそさ  
休らむも癒さし心の息もく  
懐く心真の境いふせば  
生干あゝ素お跡をすうと  
いつもあか持花の枝  
秋きて又一とまゝあはけ  
片縁くく信者の月  
糸糸のあきさうし子のこれ  
痛うつゝまてうむせさうゆ  
あ射さあゝねあぬ花のいろ  
相とあふうまてあき  
人情あけ玉いさあき

翁通欽学末翁通欽学末

十一五

産月かしたる  
う記しをよはしはてし  
約言 言のゆききぬし  
硝子くはる除足はる酒  
あらしさあはむいし  
学あゝと宿あきるし御徒  
的名の味かた被うちあさ  
大あゝと同しやあゝ  
あゝに似るぬ孫ういふ  
ゆゝたれし女の中のみ  
あゝあきぬさのい  
あゝあきぬさのい

量翁通欽学末翁通欽学末

十一五

又といかららぬ小嵐あひあす  
手持物見し一も入園さ  
油ゆけきぬ尾ハ尾をく  
くひのちえし新とさす  
極ハ風おとすけてそふく  
執事 彦 量 末 学

くくしき船の積置の船り  
厚くも多程す海地の水  
去る船の中より枯らちそえ  
蟻溜の火をくくく夕月  
ものよれし路吉の店屋からあす  
昌房 翁 正秀 野徑 猪通

すくし乳もまほし物の子  
舞やまらやあしきく  
あハ音くくく末し怪く  
くくつおまを秋くくく  
まほくく入洞のくく火  
田の中くくくくく  
其居の札の米砂の巻く  
ゆ嶽くくくくく  
ねくくくくく  
月影くくくく  
草まの自ひのあをく下  
ゆ片や海子の花をさくく  
乙州 画好 珠項 盤子 里東 探志 游力 彦 通 好 末 力

東風吹きわたる菊水の旗  
野の勢ふりく移ゆん  
皇親上子子あけし家待  
恨り義理を待し海と心  
くもれと折し事との海渡  
くすやうくすしとあふ事子の法  
御のさしある月の廻廊  
雪の奇岩御の坊を折現よ  
られ神力のくすを帰しす法  
うとまもまこいふけと跪き  
白髪さしあふ事子の命をぬ  
おこさしき義理と後と阻てし

子 秀 通 州 項 子 秀 通 州 項 子

野の可く伸る竹の子は隙  
文ハ先ニ史文選くつし  
中保和しやる登のくね  
おさへくす氣を絶くをさし  
子履ふくくむに能るのさ  
内書くくはもハ至家をとの如  
蓋の如入あむやうれ 奇

徑 通 力 子 項 徑

元禄四年の初冬茅屋の雪を  
まじり

月くぬけとくくハ対向よ子の如松  
火を折あしと子の黄く

斜 嶺 如 行

一手の仕るハ妻に松さかしくし  
かよ弦をさきし也  
歩進てう好し物さるるの  
山雀花をさける小坊主  
秋風と濁りけ渡す長い  
舟の上をさる難し  
楠端の虫破るるは  
念佛の音の河の  
わんとはぬふ小袖  
おさふふとらぬ  
かく位いぬるの物  
采つまきし物

菊  
文島  
此菊  
左柳  
怒風  
残香  
千川  
箱  
口  
辰

鶴おるよるハ雲を  
さるるの  
舟の  
月利

箱  
菊  
柳

そよ白柳さるる水  
去屋さるる  
舟の  
舟の  
せん  
舟の

白雲  
桃蹊  
芦雁  
支考  
以之





河の家ハあり新海を志行く  
了は多岐なる河の舟  
干もの道こゝろ一対  
鳥のこころんして尾ふ小  
帆志す柳子のさくらを柳  
材を様して紀すことの

之 后 先 重 舟 水

大里えらとを四面やを  
まろしてほそく松の  
いふききんちから一  
流す 松の心 松の

支考  
冷水  
白雪  
雪丸

海しき少そ是等  
疎く若花門のり  
小地路のあり 並なる  
疎りのきれぬ下子の  
疎りの拍子やあし  
吾孫をいのる九世の  
俊人子めし和くこす  
ゆ〜終と〜久く苦の  
慈の子れ親をあし  
きりて付くる危の  
字物らいつりて  
つ〜の

其雁  
桃疎  
扇車  
以之  
桃先  
桃後  
鳥  
者  
瀛  
丸  
舟

花散り霜を三葉ももえ上り  
まよふもつねぬ火燈の白き帯  
街と塔らふもつねぬ白き帯  
腹もつねぬ味字の虫物  
ふもつねぬ味字の虫物  
のの松を思はずお仕る  
海舟し踊るよれ境をゆふ  
秋風清し義經の巻  
草まき畑の草ゆくまのまけ  
小つねのあくまをく月の  
まよふのまよふ刀貝のまよふ  
気合とまよふし夫婦がまよふ

之 柳 水 之 後 先 經 丸 者 菊

さしむける宵中のまをまお拂ひ  
きれいなる弦を柳まよふ  
まよふのまよふおさ尺をけし呼ぶ  
荷をまよひあつてまよふ  
免さしとり向のまよふ  
極のまよふまよふ石  
念佛のまよふまよふ  
まよふまよふまよふ

之 先 水 重 後 有 之 乃

炭の火とくすゝぬのこしけし  
舟の舟舟を満くし引りけし  
又とくすゝぬのこしけし  
舟の舟舟を満くし引りけし  
舟の舟舟を満くし引りけし  
舟の舟舟を満くし引りけし  
舟の舟舟を満くし引りけし  
舟の舟舟を満くし引りけし  
舟の舟舟を満くし引りけし  
舟の舟舟を満くし引りけし

梅人  
文彦  
湘水  
年三  
桃林  
馬蹄  
野幽  
利雨  
越人  
桐葉  
桃李

元禄三年三月廿七日伊賀上野風瀑

舟

舟の舟舟を満くし引りけし  
舟の舟舟を満くし引りけし  
舟の舟舟を満くし引りけし  
舟の舟舟を満くし引りけし  
舟の舟舟を満くし引りけし  
舟の舟舟を満くし引りけし  
舟の舟舟を満くし引りけし  
舟の舟舟を満くし引りけし  
舟の舟舟を満くし引りけし  
舟の舟舟を満くし引りけし

風瀑  
良の  
古芳  
半残  
舟  
瀑  
不  
芳  
孫

二十

美夜を尺とんと人のうちひきて  
井戸の端をさしゆききりて  
涼のさの縁を敷て月を待  
むしるをさしゆききりて  
雨のたつたかきくやの尾をまて  
神のり尺とんとふもふら  
候のさの縁を敷て月を待  
長をさしゆききりて  
候のさの縁を敷て月を待  
候のさの縁を敷て月を待  
候のさの縁を敷て月を待  
候のさの縁を敷て月を待

候のさの縁を敷て月を待

美夜を尺とんと人のうちひきて  
井戸の端をさしゆききりて  
涼のさの縁を敷て月を待  
むしるをさしゆききりて  
雨のたつたかきくやの尾をまて  
神のり尺とんとふもふら  
候のさの縁を敷て月を待  
長をさしゆききりて  
候のさの縁を敷て月を待  
候のさの縁を敷て月を待  
候のさの縁を敷て月を待  
候のさの縁を敷て月を待

候のさの縁を敷て月を待



此のまゝに定りし如くは良の堂  
信子に書かれししきとて人  
番よりかゝ友よりかゝる文とて

篇  
文章  
許六

ねく座よりあつては木の梢にも  
かまきりそのゆくゆくみゆ虫

露川  
篇

あつては海や波してあつてみら  
一夜きりかゝる強きゆの雲

篇  
李由

本可く一にふとをさ申さん一守  
四々五々の妙向 雲

規外  
篇

初階よりあつては秋より葉虫  
ふりかゝる一と

篇  
如行

Handwritten text in a rectangular frame, possibly bleed-through from the reverse side. The text is faint and difficult to decipher but appears to be organized into columns or lines.

八十八



